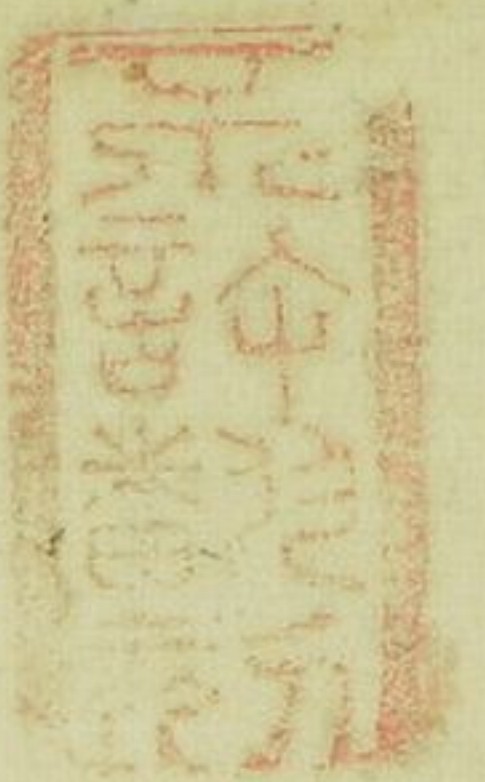


遠近新聞  
第二十二號

定價一匁



西垣文庫  
文庫 10  
7265  
20



特 文庫10  
7265  
20



遠近新聞第二十二号

慶應四年五月廿二日

新刊兵庫大坂新聞抄出一千八百六十八年六月

六日 慶應四年閏四月十六日

大坂の運上<sup>うわさし</sup>所<sup>ところ</sup>の側<sup>そば</sup>に商人の<sup>あつち</sup>貯藏<sup>たくわん</sup>急速<sup>きゅうそく</sup>出来<sup>き</sup>よ<sup>う</sup>べ  
し<sup>に</sup>但<sup>たゞ</sup>し我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>兼<sup>かみ</sup>て日本<sup>にっぽん</sup>人<sup>びと</sup>より買<sup>かひ</sup>受<sup>うけ</sup>け<sup>る</sup>地<sup>ち</sup>所<sup>ところ</sup>の北<sup>きた</sup>辺<sup>へ</sup>  
の貯藏<sup>たくわん</sup>の旧<sup>ふる</sup>地<sup>ち</sup>に此<sup>こゝ</sup>度<sup>ど</sup>止<sup>とど</sup>め<sup>め</sup>あり<sup>あり</sup>し<sup>し</sup>の報<sup>ほう</sup>告<sup>こ</sup>あり  
二人<sup>ふたり</sup>の浪<sup>なみの</sup>人<sup>びと</sup>大坂<sup>おおさか</sup>市<sup>し</sup>中<sup>ちゆう</sup>に潜<sup>かづ</sup>伏<sup>ふく</sup>せ<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>を前<sup>まへ</sup>月<sup>つき</sup>中<sup>ちゆう</sup>同<sup>どう</sup>所<sup>ところ</sup>諸<sup>しよ</sup>  
大名<sup>だいめい</sup>の屋<sup>や</sup>鋪<sup>ぽう</sup>へ布<sup>ふ</sup>告<sup>こ</sup>あり<sup>あり</sup>右<sup>みぎ</sup>二人<sup>ふたり</sup>の元<sup>もと</sup>来<sup>きた</sup>旧<sup>ふる</sup>政<sup>せい</sup>府<sup>ふ</sup>に仕<sup>つか</sup>へ  
て高<sup>たか</sup>官<sup>くわん</sup>の者<sup>もの</sup>あり<sup>あり</sup>しが先<sup>まづ</sup>頃<sup>ころ</sup>京<sup>きやう</sup>師<sup>し</sup>の事<sup>こと</sup>件<sup>けん</sup>より浪<sup>なみの</sup>人<sup>びと</sup>とあ

遠近新聞

第二十二号

百十

西垣文庫

5731

りありん故又彼等定か大名又の役人の其身を滅  
亡させし者も復讐せん事も難測とて當月朔日四  
月十日より外國人居留地の入口に夫々番兵を置き  
嚴しく警固して公用の外右居留地へ通行を差止め  
し隨つて是れを見物人をして賑わのある居留地も  
寂寥とありしり諸日本人の曰く此番兵の居留地は  
人を入まざる爲ありと外國人答へて曰く此度の全  
く右兩人の浪士を防ぐためを門毎一人づつ  
兵士を備へて充分なるべし教多の番兵を置よ及を  
ざるべしと

日本より何事も逆は行くと見へる用心弥嚴重か  
るに乱妨狼藉亦弥多し夫の左の事を以て推て知る  
べし當月二日十四日兩刀を帶びし者一人居留地  
の入口へ来りて其名の忘るるが或る外國貴人を目  
撃け刀を振ふて突入せり其時右外國人の即ちピス  
トル筒を取り寄せて其突入する士を狙ふの猶豫あ  
りしが彼士の夫を見て忽ち逃去りしり外國人の此  
士を打逃がせしは實に怪しむべき事あり夫の扱置  
右外國人の最寄りの番兵屯所より走り来りて其由を  
告しり此事の兩三間中は何れも事ありし今番兵の

知らざりし急情と謂つべき事あり

右は舟諸外国人は忠告を必らずに武器ありて通行せ  
べしとせ若し右等の無法の士を打殺せば余人の懲  
りめともあるべしあり

當月四日十四日の夜大坂新地町は火事あり二十軒  
焼失を同日十五日先頃會津討手として向ひし

七諸侯の援兵の大軍東方は出立せり

前水曜日十四日醍醐大納言兵庫より大坂に到着せ  
り右に巡見の旅行して途中諸所を立寄しりとのり  
此公家の衣服の先頃公使等を訪来りし高官の役人

と同格にて供立の通例の兩侍と施條筒の小隊あり

當節兵庫在泊各國軍艦の員數

- 英 セブラ船九百五十一噸 大砲三門
- 同 バンテリール船四百噸 大砲三門
- 佛 ドフテイクス船千七百四十噸 大砲十二門
- 亞 ラツニータ船千百噸 大砲十門

後藤達三訳

參謀大久保市藏當今江戸へ來着の噂あり

○ 佛國在留の民部太補殿に帰国よお成小振  
大総督より申達有之右に水戸中納言殿に養子よお  
成小哉の噂あり

○ 雑司ヶ谷鬼子母神門前若荷屋とり料理店へ新彰  
義隊と号し侍七人二日程逗留飲食しつゝ寂寄り民  
家へ中舟金子幾何調達十三日又堀の内辺に立の  
由中岡同所と出立りしに処あるとせし雑司ヶ  
谷名主某の宅に押込金子強談中掛し舟兼て同村

中合して早鐘打鳴し百姓等驅逐り竹鎗等を以て追  
散らし兩人をど打取り生捕等も有之由右に勿論新  
彰義隊の者よりしを真の盗賊しつゝ隊名を盗し  
者共あり金銀を奪ふに重くしを名義を盗むに猶重  
し何ぞ天誅を道づらんや

○ 十六日彰義隊のもの雑司ヶ谷の先よ脱走せし由

○ 佛蘭西国より去る四月十四日出の書状到着せし其  
文中に近々同国より軍艦数艘を日本へ差向べしと

の支度あるよしと認めし何故あるや詳々ありしを  
恐く先達て堀りて佛人の殺されし報告の本國  
に到着せし故ありん又云菅沼左近將監栗本安藝守  
山内文次郎木村宗三高松凌雲大岡松吉并に和蘭留  
學生赤松大三郎等四月廿七日に出帆し帰國する  
云々

○北國筋確報

三國街道關宿より田四月廿九日出の書扶到來し文  
中云淺貝ニ夕井の二宿に兵火を燒失し人馬繼  
立出来不中三國峠に會藩壯士林勇次郎と中者の首

級青竹の先は晒有之夫より東山道官軍千余人と會  
脱四十人程と過日戦争あり場所を經過のしに  
右戦の節會脱の討死三人勇次郎其内の一あり由  
夫より三股宿に掛りて官軍九百人斗り小千谷よ  
り引返りし由を屯集し旅人をお改む夫より湯沢  
關塩沢等のいづれも人馬無之六日町宿に信列路よ  
り操込の官軍のよ一夥しく在陣に風聞し此程既  
は小千谷をて一戦ありし小千谷の會津の領分  
を頗る富有の市場あり云々

○五月十日は越後より來着せる人の直話を抄

載止

三国峠戦争の節會兵凡五十人大將の小千谷奉行池  
 上某とのり者あるより官軍方の東山道総督府巡察  
 使の兵二百五十人其外高崎安中厩橋伊勢崎沼田等  
 合せり千余人あるより衆寡敵せし會兵敗散し官軍  
 追々進軍の所信列口の官軍の一流一万余人よて柄  
 窪峠の會兵を破り六日町入りし故に東山道の  
 兵の先鋒の役を是に譲りて引返り三国峠の險に現  
 今高崎其外よて之を守るとのり

